七ケ浜町文化財調査報告書第一集

史跡「大木囲貝塚」環境整備調査報告書Ⅰ

昭和48年3月

七ケ浜町教育委員会

〔正誤表〕

ページ	行	誤	正
3	11	標高は約30m前後であり、	標高は約35m前後であり、
8	9～10	過去に於いて地元の人々によって採集された若干の遺物を加えたものである。	過去に於いて地元の人々によって採集された若干の遺物を加え、更に過去の調査によって出土し、文献に発表されている断片的資料をも集成したものである。
10	3	定角式磨製石斧であり、擦り截り手法で製作されている。小形のものは…	定角式磨製石斧である（1、2）。小形のものは…
24	30	菊池勝之助	菊地勝之助

序

大木囲貝塚は，日本有数の大貝塚である。その形は馬蹄形を呈しており，縄文式時代前期から数千年の長きにわたって，断続的に先住民が生活した場所である。

この貝塚は，松本，長谷部，山内博士の調査によって，にわかに有名になり，その出土品には，石器・土器・骨角器・獣骨・魚骨・鳥骨・人骨等があり，考古学的研究資料が豊富に埋蔵されている。

しかるに，当貝塚は，眺望がよく，住宅地としては最適地であるため，昭和42年に，貝塚の一部が，宅地造成されたが，急遽，史跡指定によって，保護されることとなった。昭和43年度より，用地の買収が開始されたが，土地の騰貴と眺望絶佳のため，その交渉は困難をきわめたが，当時の町長である渡辺庄一氏は意を決し，先行投資により，昭和46年２月全面的に買収したものである。

その後，指定区域の耕作地は，全く耕作されず，全域に雑草・雑木が繁茂，密生し，史跡として見るかげもない状態となったので，多額の費用で買上げた用地と，貴重な埋蔵文化財を保護，活用するため，史跡公園として環境整備を行なうことにした。本環境整備事業は昭和47年度より６カ年継続事業として行われるものであり，さしあたって本年度は初年度であるため，境界標設置，地形測量，苑路の一部造成，貝層の分布調査を行なった。その成果を本報告書として，まとめ発刊するものである。

本報告書によって大木囲貝塚の価値を地域社会の人々に理解して戴き，更に研究者の方々の参考となれば幸甚である。

なお，この環境整備事業並びに報告書の作成に当って，懇切に指導下さった文化庁の安原啓示氏，多賀城跡調査研究所長の岡田茂弘氏，並びに環境整備指導委員会の委員の方々に深甚なる感謝を捧げ申し上げます。

昭和48年３月

七ケ浜町教育委員会教育長　山　家　　正

目　　次

第一章　環境整備事業に至るまでの経過及びその内容…… 1
第二章　大木囲貝塚の位置と周辺の貝塚…… 3
一．大木囲貝塚の位置…… 3
二．周辺の貝塚…… 3
第三章　大木囲貝塚に関する過去の調査…… 5
第四章　発見遺物 …… 8
Ａ．人工遺物…… 8
１．石器…… 8
２．骨角器…… 11
３．歯牙製品…… 12
４．貝製品…… 12
５．土器…… 12
６．土製品…… 16
７．過去の調査で出土した遺物…… 16
Ｂ．自然遺物…… 18
１．脊椎動物門…… 18
２．節足動物門…… 18
３．軟体動物門…… 18
第五章　ボーリングによる埋蔵貝層分布調査結果…… 19
大木囲貝塚文献目録…… 21

本報告書の執筆及び本報告書掲載の実測図作成，写真撮影は，七ケ浜町教育委員会史跡「大木囲貝塚」環境整備嘱託調査員の福田友之が行なった。

第一章　環境整備事業に至るまでの経過及びその内容

宮城県宮城郡七ケ浜町所在，史跡「大木囲貝塚」の環境整備事業が国，県の補助金を受けて，昭和47年度より七ケ浜町教育委員会によって実施されることとなった。

史跡「大木囲貝塚」は，その学術的意義によって，昭和41年３月，国の文化財保護委員会によって史跡指定の決定を受けた後，昭和43年３月18日に至って，正式に史跡として指定告示され，昭和43年度より，国，県の継続的補助金を受けて，史跡指定地の買い上げ事業が行われて来た。この買い上げ事業は，昭和46年２月に先行取得によって全面的に行われ，一段落したが，この後，史跡指定区域内では，全く耕作が行われず，該区域全域は，雑草，樹木が繁茂，密生し，史跡として，見るかげのない状態を呈することとなった。

この様な史跡自体の状況と近年，急速に開発が進められて来た周辺地域の状況の中で，この史跡の保護及び地域社会に於ける活用を目的として，本環境整備事業が開始されることとなったわけである。この整備事業は昭和47年度より６カ年継続事業として行われるものであって，その内容は基礎的調査事項としては，地形測量，表面採集，ボーリング，試掘，遺構検出等の諸調査，整備事業事項としては，刈払い・伐採作業，竪穴式住居等の遺構復元工事，遺構の表示施設（貝層分布範囲表示施設，貝層展示棟等）の建設工事，諸標識の設置工事，資料館建設工事，苑路造成工事，植栽工事，囲柵工事，池造成工事等が計画，予定されているが，本年度は，その初年度であるという点で，専ら基礎的な調査及び整備事業が行われた。本年度の整備事業内容は以下の様である。

1．地形測量―史跡指定区域全域約190.000㎡を縮尺300分の１，50cm間隔等高線で測量し，これに主要なる樹木を入れる。

2．貝層分布調査―史跡指定区域全域の埋蔵貝層範囲の確認のため，基本的には３ｍ間隔でボーリングステッキを刺突する。

3．境界標設置工事―13×13×90cmのコンクリート製境界杭を史跡指定区域の境界線の屈折する地点及びその他の主要な地点に100本埋設し，基礎をコンクリートにて固定する。

4．苑路造成工事―砂利敷の巾２ｍの苑路を本年度は261ｍの距離にわたって造成し，これに側溝，マンホール等を付設し，更に芝張りをも行なう。

本報告書は，これらの環境整備事業内容の内，貝層分布調査及びこれに伴なう諸調査に関するものである。

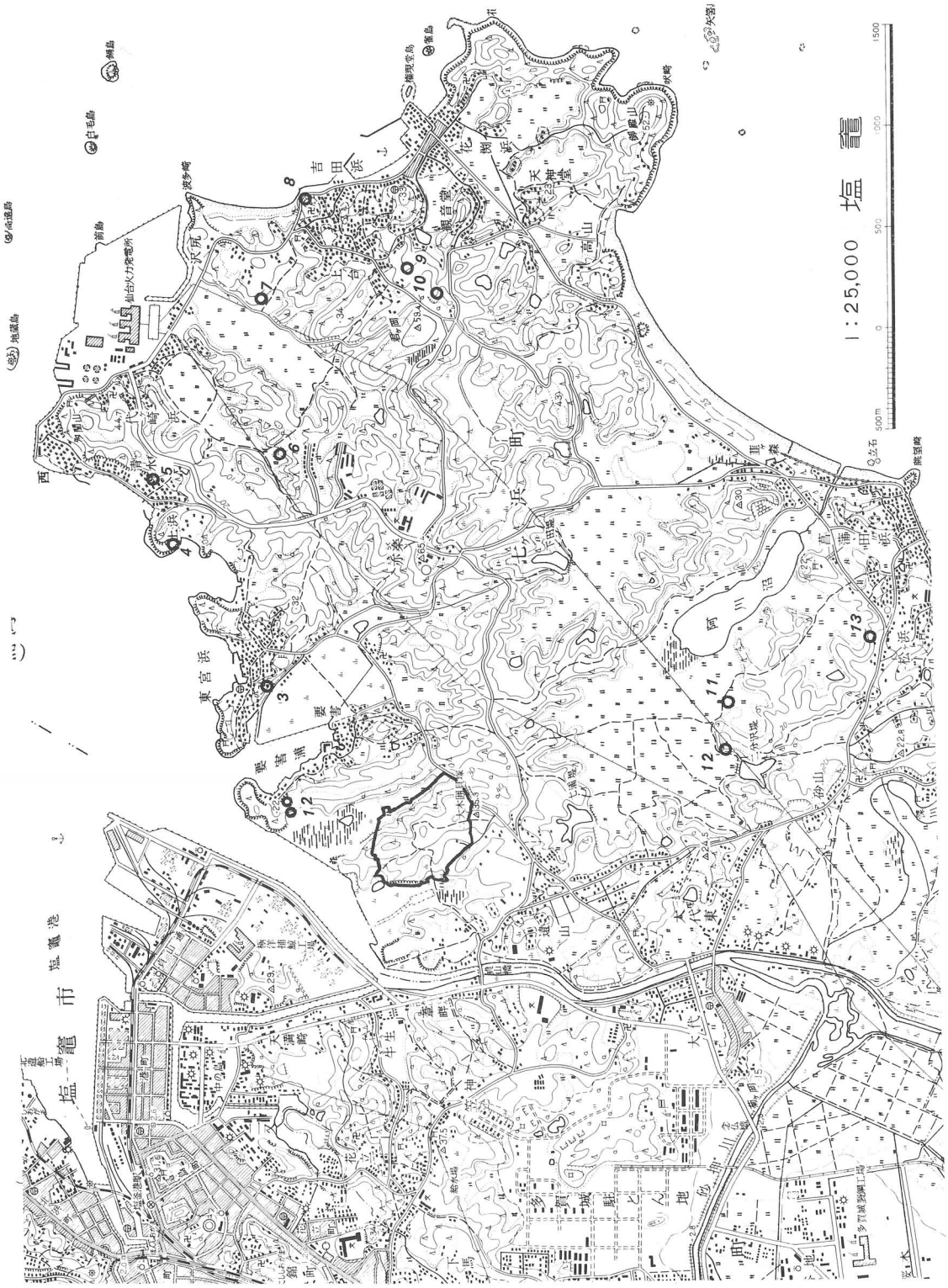


Fig.－1　大木囲貝塚（黒線内が史跡指定区域）と周辺の縄文式時代の貝塚

第二章　大木囲貝塚の位置と周辺の貝塚

一．大木囲貝塚の位置（Fig. 1）

宮城県中央部の太平洋岸は，東を牡鹿半島によって限る南に開口した仙台湾を形成している。この仙台湾は，西の松島湾，東の石巻湾の二つの湾よりなり，更にそれぞれ小さな湾群より構成され，リアス式海岸と呼ばれる出入りの複雑な海岸地形を示している。この仙台湾の湾奥部，岬の突端部その他の丘陵部，更には島嶼部には，多数の貝塚が形成されており，わが国有数の貝塚密集地帯としての評価を得ている。大木囲貝塚もこれらの貝塚群の一つとして考えることができる。

松島湾の西南部は塩釜湾と呼称され，この南部に，東南から北西の方向に長さ 700 m程度の舌状小半島が突出している。大木囲貝塚は，この小半島の南寄りの丘陵部の周辺部に馬蹄形状に存在する。標高は約~~30~~35 m前後であり，基盤は，地質学的には，新生界第三系中新統の松島凝灰岩によって，その最上部が覆われている（奥津，1970）。

史跡指定区域は，この貝塚を中心として，東西およそ430 m，南北およそ570mに亘り，面積にして約190.000m²の広さを持つ。地籍は，宮城県宮城郡七ケ浜町大字東宮浜字東大木，西大木，北下方，南下方の四つの小字に跨って所在するが，貝塚の主体部は東大木と西大木に属する。

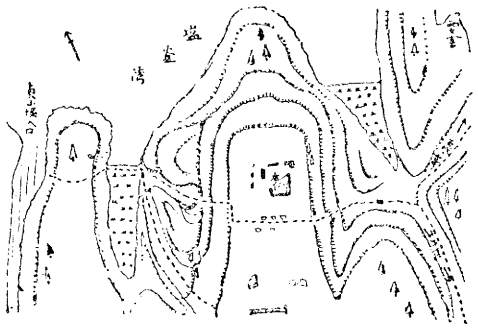


Fig.－2　大木囲貝塚略図
村主（文献：10）による

大木囲貝塚の大木なる地名に関しては，地元の人々の間では，以前，貝塚中央部に榎の大木があったためと伝えられている（Fig. 2）が，大木囲貝塚の地は別に要害とも称されていることから，この要害の地名は，過去に堅固な城塞のあったことを意味し，これを大城（おおき）と称していたものを（だいぎ）と読み変え，更に「大木」に書き変えたものとする解釈もある（文献，73）。

二．周辺の貝塚（Fig. 1）

七ケ浜町内には，過去の調査に加えて，最近の分布調査によって，大木囲貝塚の他にも15カ所の貝塚の所在が確認されている（文献，72）。これらの貝塚には，縄文式時代，弥生式時代，古墳・奈良・平安時代のものが含まれるが，縄文式時代の貝塚に限ると，七ケ浜町内最古の貝

塚は吉田浜貝塚(8)であり，昭和38年，40年の２度の調査により，縄文式時代早期の土器，石器類が発掘されている（後藤，1968）。早期末葉より縄文式時代前期初頭の貝塚としては，東宮浜の左道貝塚(2)（宮城県教育委員会他，1972），下方貝塚(1)がある。花渕浜藤ケ沢在の君ケ岡貝塚(10)，藤ケ沢貝塚(9)では，縄文式時代前期後半，中期の遺物が確認され，東宮浜鳳寿寺貝塚(3)は縄文式時代後期中葉から弥生式時代以降，平安時代の遺物を出土するが，昭和40年の調査では奈良時代末から平安時代初頭の製塩遺構も検出されている（後藤，1970，1972）。吉田浜の二月田貝塚(7)も後期後半から弥生式時代にかけての遺跡であるが，昭和44年，45年の調査によって，豊富な土器（製塩土器も含めて），石器，骨角器，装身具を出土し，更に住居跡及び埋葬人骨も検出されている（塩釜女子高社会部，1970，1972）。代ケ崎浜の土浜貝塚(4)，沢上貝塚(6)も後期から縄文式時代晩期の遺跡であるが，沢上貝塚は，昭和41年に調査され，土器，石器，骨角器類を出土している（後藤，丹治，槇，1971）。縄文式時代晩期後半，弥生式時代の遺物は代ケ崎浜の清水貝塚(5)，松ケ浜の笹山貝塚(13)，林崎貝塚(12)，菖蒲田浜の小塚貝塚(11)で確認されている。

これらの縄文式時代の貝塚やそれ以降の時期の貝塚の他に，貝塚を伴わない遺跡も七ケ浜町内で，13カ所確認されている（文献，72）。しかしながら，これらの遺跡の過半数は未調査のものであって，その遺跡の内容，性格は具体的には把握されていないのが現状である。又，未確認の遺跡もあろうかとも考えられる。これらの諸貝塚及び貝塚を伴わない遺跡群と大木囲貝塚との関連性を明確に把握することによって，七ケ浜町の先史時代の具体的把握が可能になると思われる。

引用文献

奥津春生　「松島の地質と化石」『特別名勝松島―松島調査報告書』　1970年３月

後藤勝彦　「宮城県七ケ浜町吉田浜貝塚〔Ⅰ〕」『仙台湾周辺の考古学的研究』　1968年12月

後藤勝彦　「宮城郡七ケ浜町東宮鳳寿寺貝塚製塩址」『日本考古学年報』18　1970年４月

後藤勝彦　「東北に於ける古代製塩技術の研究」『宮城史学』２号　1972年３月

後藤勝彦，丹治英一，槇要照　「宮城県七ケ浜町沢上貝塚の調査」『仙台湾』創刊号　1971年８月

宮城県塩釜女子高等学校社会部　『宮城県七ケ浜町二月田貝塚』Ⅰ・Ⅱ　1970年８月，1972年８月

宮城県，宮城県教育委員会，宮城県文化財保護協会　「宮城県考古資料展解説」　1972年６月

第三章　大木囲貝塚に関する過去の調査

大木の丘陵に貝殻が散布しているという事実は明治年間に於いて既に一部の地元の人々の間では知られていたらしく，大正年間に入って，遺物採集の目的で，この貝塚を訪れる人も出て来たようである。

大木囲貝塚の名が初めて学界に紹介されるようになったのは，大正８年に入ってからのことで，松本彦七郎，長谷部言人の両博士によってである（文献１，２）。

大木囲貝塚が今日，わが国有数の貝塚として評価されている事情のそもそもの発端は，大木囲貝塚と両博士との結びつきにあると言える。

当時のわが国考古学界は，漸く縄文式土器と弥生式土器，更に須恵器との先後関係が漠然とではあるが，わかりかけて来た段階であって，縄文式土器自体の変遷は殆ど把握されておらず，縄文式土器の文様，形態の差は専ら人種の違いによるものとする見解が大勢を占めていた。この様な状況の中で，松本彦七郎博士は当時，東北帝国大学理学部地質・古生物学教室に，長谷部言人博士は，同医学部解剖学教室にあって，ともに地質学，古生物学に於ける進化論的視点と層位的発掘調査等の新しい理論と方法で三陸地方の獺沢貝塚，松島湾内の宮戸島貝塚，大木囲貝塚を発掘調査した（松本博士の大木囲貝塚調査は大正６年頃，長谷部博士の大木囲貝塚の発掘調査は大正７年10月20日）。松本博士は，これらの調査結果から，わが国の土器を第一期の大木式より第六期の埴瓮，斉瓮期の六期に分類し（文献，１），縄文土器を含めて土器の時期的変遷を把握するという画期的な業績をなしとげた。この方法論は，後世の縄文土器の編年的研究の先駆をなすものとして評価されることとなった。

大正14年７月20日，同21日には，京都帝国大学医学部病理学教室の清野謙次博士が大木囲貝塚（東側緩傾斜面の頂上付近）を発掘調査している。その報告書は昭和44年に出版された（文献，71）が，それによれば，縄文土器は大木７式から８ b式を主体として，他に３，５，６式が出土し，石器類では，石鏃・石匙・磨製石斧・凹み石・岩版・飾玉・玦状耳飾・石棒が出土し，貝製品では，貝輪が出土している。他に人骨片数片と多くの獣・魚・鳥骨が出土している（Fig. ９－５）。

ちょうどこの頃，東北帝国大学医学部解剖学教室で長谷部博士の副手をしていた山内清男氏は，縄文土器の全国的編年作業に着手していたが，昭和２年７月より３年にかけて，大木囲貝塚Ａ，Ｂ，Ｃ，Ｄ，Ｅの各地点（現在，この各地点は地図上に正確な位置を確認し難い）を発掘し，出土土器の層位学的，型式学的研究によって，昭和４年までには，大略，大木１式土器から10式土器までの編年を完成させていた様であり，その成果は，昭和４年５月（文献，11），

同7月（文献，12）の二つの論文にまとめられた。そして，昭和12年1月には，氏によって，縄文土器の全国的編年の大綱が図式化された形で発表され（Fig. 3），大木式土器は10型式から13型式（大木1，2a，2b，3，4，5，6，7a，7b，8a，8b，9，10式）へと更に細分され，内，大木1式から6式までは縄文式時代前期に，7a式より10式までが縄文式時代中期に位置づけられる（文献，18）に及んで，大木式土器の編年体系は，東北地方南部の縄文式時代前期，

縄紋土器型式の細別と大別

	渡島	陸奥	陸前	関東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曽根？× (+)	ひじ山 粕畑		黒島×	戦場ケ谷×
前期	石川野× (+)	円筒上器 下層式 (4型式以上)	室浜 大木1 〃 2a，b 〃 3－5 〃 6	蓮田式 花積下 蓮田式 関山 蓮田式 黒浜 諸磯a，b 十三坊台	(+) (+) (+) 踊場	鉾ノ木×	国府北白川1 大歳山	磯ノ森 里木1	轟 ？
中期	(+) (+)	円筒上a 〃 b (+) (+)	大木7a 〃 7b 〃 8a，b 〃 9，10	五領台 阿玉台・勝坂 加曽利E 〃 (新)	(+) (+) (+) (+)			里木2	曽畑 阿高 出水 ？
後期	青柳町× (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曽利B 〃 安行1.2	(+) (+) (+) (+)	西尾×	北白川2×	津雲上層	御手洗 西平
晩期	(+)	亀ケ岡式 (+) 亀ケ岡式 (+) 亀ケ岡式 (+) 亀ケ岡式 (+)	大洞B 〃 B－C 〃 C1，2 〃 A，A′	安行2－3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野×	吉胡× 〃 × 保美×	宮滝× 日下×竹ノ内× 宮滝×	津雲下層	御領

註記 1．この表は仮製のものであって，後日訂正増補する筈です。
2．(+)印は相当する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
3．(×)印は型式名でなく，他地方の特定の型式と関聯する土器を出した遺跡名。

Fig.－3 縄文式土器編年図 山内（文献：18）による

中期の標式とされるに至った。これによって大木式土器，更に大木囲貝塚の名は考古学界に於いて広く喧伝せられ，今日に於ける大木囲貝塚の評価を決定づけたと言える。

これらの一連の業績によって，大木囲貝塚に対する関心の昂揚する中で，多くの研究者がこの貝塚を訪れたと思われるが，それが本格的な調査となって現われるのは第二次世界大戦後のことである。終戦とともに，日本古代史の実証的研究のタブーが除かれ，大木囲貝塚の発掘調査は再開され，昭和23，4年頃には，遠く鎌倉学園考古学部による調査が行われ，大木9，10式の縄文土器，及びこれに伴なったと思われる石鏃・石匙・石錐の石器類，尖頭器・釣針・骨針・骨鏃等の骨角器が出土している（文献，61，Fig. 9－1）。更に昭和24年10月14日から17

日までは，東北大学文学部の伊東信雄教授による発掘調査が行われ（Fig. 10），その後，昭和38年7月には，東北大学教育学部歴史研究室によって，A，B，両地点（Fig.10）が調査され，更に，昭和40年にも同研究室によって，C，D，Eの各地点（Fig.10）の調査が行われている。

この様に，大木囲貝塚は多くの研究者によって調査が行われ，学史的な評価を受けて来たわけであるが，調査担当者による調査報告が殆ど公表されていないため，大木囲貝塚の貝層分布範囲，更に貝塚の内容，性格といった実質的な面に関しては，殆ど知られていないのが現況である。貝塚自体に関する報告，論文は，松本博士，酒詰仲男博士による自然遺物の集成（文献，14，39），金子浩昌氏による本貝塚出土アシカ科動物に関する研究（文献，64），山内清男博士による本貝塚に於ける魚骨の豊富な点及び遺物包含層の広大なる点の指摘（文献，37）等があるが，いずれも断片的なものであって，大木囲貝塚の実質的な面に関しては，なお未調査の部分が多く，その意味では，本貝塚の有する実質面に於いては，過少評価を受けて来た嫌いがある。

この様な状況にあって，本年度より開始された本貝塚の整備事業に於いて，ボーリングによる貝層分布調査が実施されるという点は，本貝塚の実質面を知る上での基礎調査と言えるものであり，従来の貝塚調査方式を一歩進めた形の調査と言える。

第四章　発　見　遺　物

ボーリングによる貝層分布調査に先立ち，貝殻散布地域の刈払い・伐採作業更に表面採集調査を実施した。表面採集調査の目的は，この調査によって，貝塚各地点の形成時期及び貝相に関してのある程度の推測ができるのではないかという点にある。これによって，地点別による時期差及び構成する貝相に違いが認められるならば，この学術的意義は言うまでもなく，発掘地点の選定に当っての見通しが得られることとなるわけである。

今年度の表面採集調査は貝塚の主体部を含めた約45.000m²の地域に10m方眼をかけて行なった。その結果，以下に報告する多くの遺物を採集できた。今回報告するのは，この調査によって得られた遺物に，過去に於いて地元の人々によって採集された若干の遺物を加えたものである。

A．人工遺物

1．石器（Fig. 4，5）

石鏃（せきぞく）―形態上，大きく三類に分類される。a類―三角形状のもので，底辺部に抉（えぐ）り込み及び茎（なかご）を持たないもの（13～15）。b類―三角形の底辺部に抉り込みを有するもので（16～37），抉り込みの浅いもの，深いもの，更にその形状の違い等，ヴァラエテイに富む類。c類―三角形の底辺部に茎を作出した類（41～44）。

形態的には茎を有する類が少ない点が観察されるが，この点に関しては，喜田貞吉（きたていきち）博士が既に指摘している（文献，16）。使用される石質は大部分が頁（けつ）岩であるが，少数のめのう(42)，黒曜石（21）も見られる。両面より細かな剝離を加えたものが圧倒的に多いが，片面のみに剝離を加えたもの（17）もある。

尖頭器（せんとうき）―頁岩製（38）。

小形石槍（せきそう）―いずれも頁岩製である。(39)は，欠損部が多いが，細長い槍先となると思われる。(40)は，両面より剝離して鋭利な部位を作り出している。

石錐（せきすい）―いずれも先端部が欠失しているが，両面からの剝離によって先端部を作り出していると思われる。すべて頁岩製（11，12）。

石匙（せきひ）―縦形の形態のみである（9，10）。ともに頁岩製。

掻器（そうき）（スクレイパー）― 剝片の周辺に両面（7，8）或いは片面（6）より剝離を行ない刃部を作出したものである。いずれも石質は頁岩である。他に，剝片の一部に片面及び両面より剝離を加えたのもある。

石斧（せきふ）－a－打製石斧（52，53），ともに安山岩を用いて作られているが，片面加工（52）

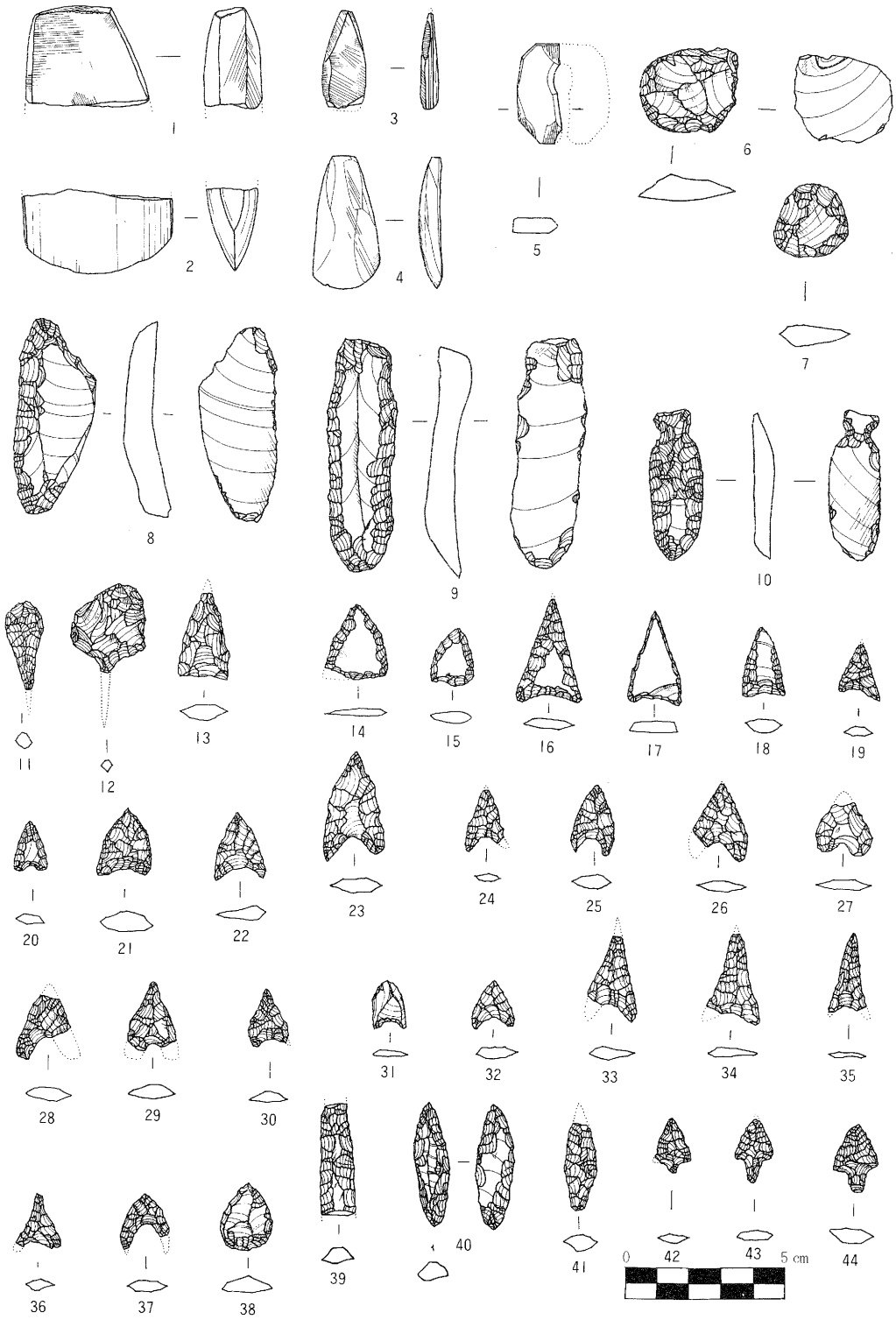


Fig.－4　大木囲貝塚発見遺物Ⅰ（石器その１）

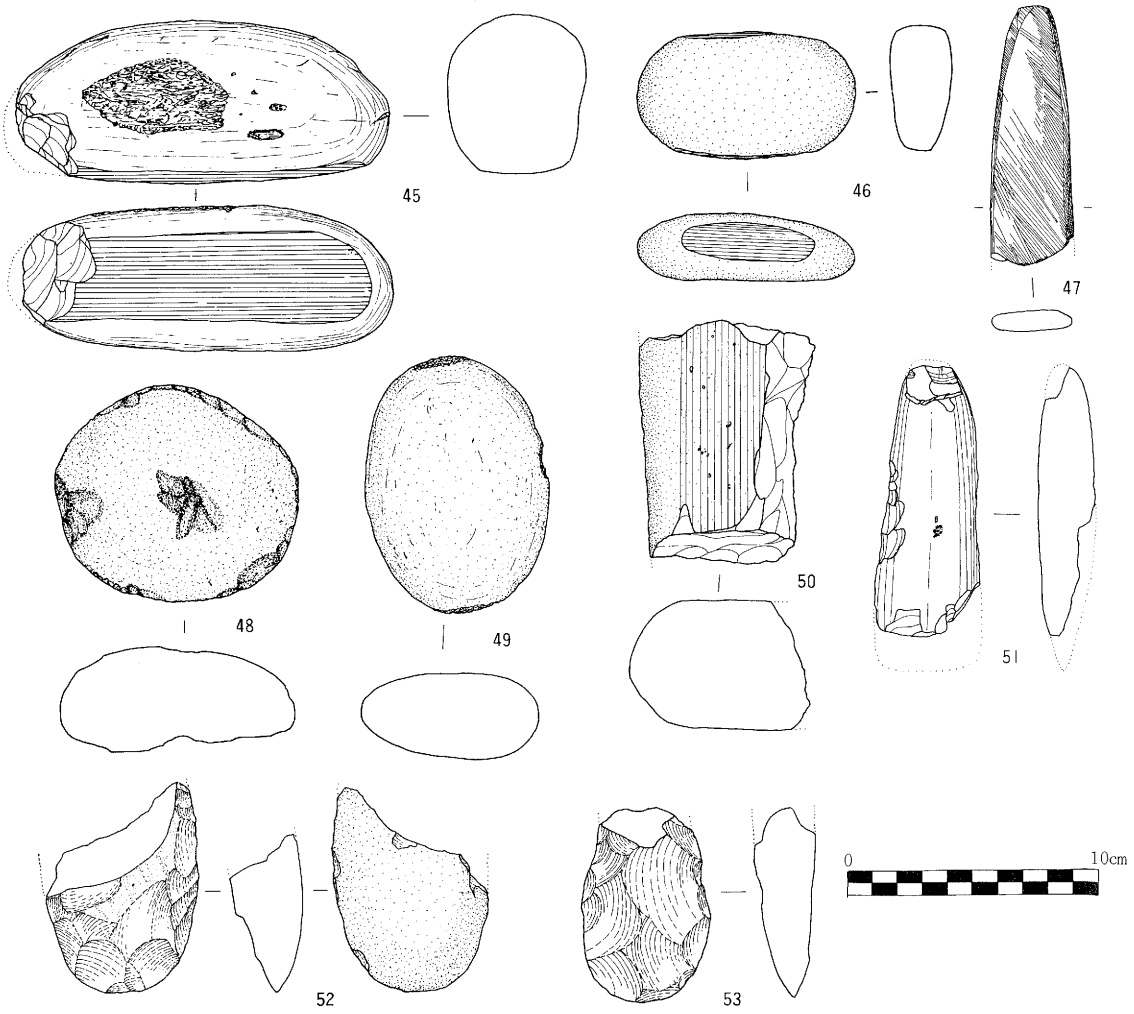


Fig.－5　大木囲貝塚発見遺物2（石器その2）

と両面加工のもの（53）がある。いずれも欠失部を持つが，後者は胴部のくびれの弱い短冊形を呈すると思われる。b－磨製石斧（1～4，51）。大形のものはそれぞれ頭部，刃部を欠損しているが，定角式磨製石斧であり，擦り截り手法で製作されている。小形のものは，多くの磨った面が観察され，全面に様々の方向に擦痕が認められる。石質は，安山岩或いは緑泥片岩等を利用している。

磨石－ともに安山岩を用いており，その一端（45）或いは両端（46）を横方向に磨り減らしたものである。形態としては前者の如き半月形のものが多い。

凹み石－安山岩の自然礫の両面より，敲打によってくぼみをつけたもので，更に周縁に沿つた敲打痕も観察される（48）。

敲き石－安山岩の自然礫の３カ所に細かな敲打痕を有する（49）。

石皿－多孔質の安山岩を利用し，一面を磨り減らしたもので，縁はない。欠損部が多く全形を窺いえない（50）。

石剣－粘板岩を磨って製作したもの。一端はすぼまる（47）。

玦状耳飾り－粘板岩製であり，半分は欠損している（５）。

これらの遺物の編年的位置づけは，すべて表面採集のため，明確にはできない。採集土器の型式範囲から，縄文式時代前期から中期としておくべきであろう。

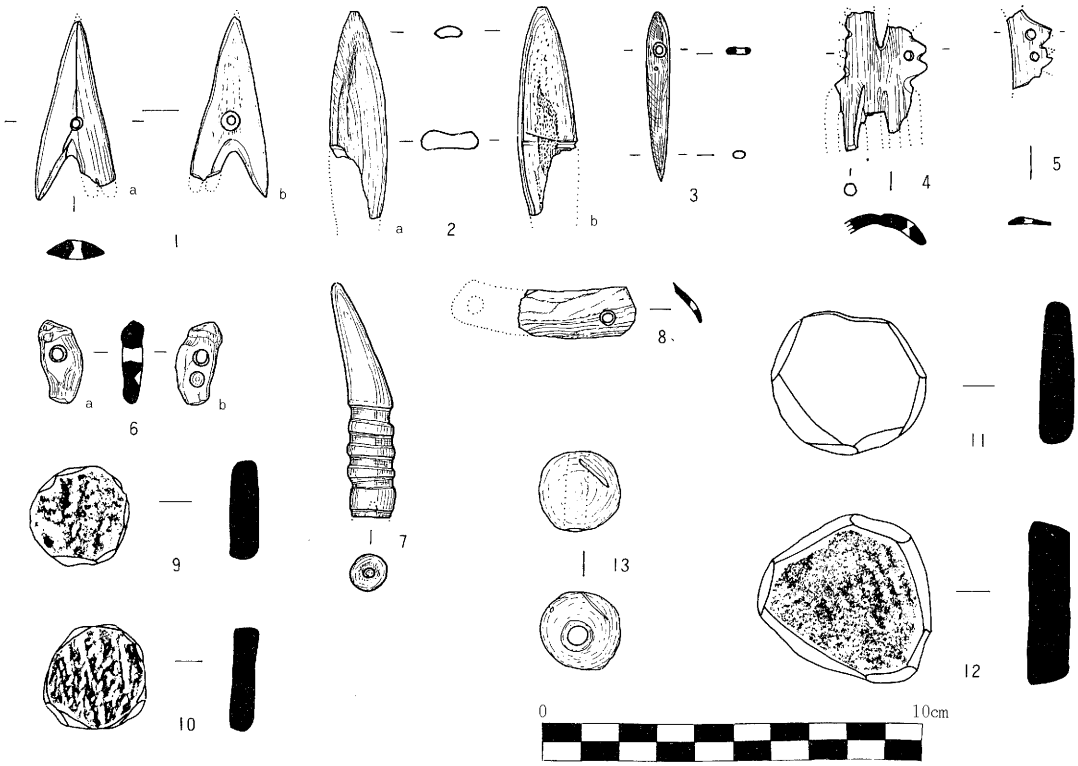


Fig.－6　大木囲貝塚発見遺物３（骨角牙製品・貝製品・及び土製品）

２．骨角器（Fig. 6）

銛頭（１）－七ケ浜町在住の鈴木幹生氏により，古式離頭銛頭が採集されている。a 面は鹿角の自然面を磨り減らし，b 面も同様にして整形しているが，鹿角内部の海綿質の部分を残している。索孔は両面より穿孔されている。

尖頭器（２）－鹿角製で，片面に横方向から切り込みが入れられている。a 面は鹿角の自然面を磨り，中央部に縦に浅いへこみを有する。b 面は海綿質の部分で，磨り減らして整形

した痕跡がある。一部欠失しており，原形は不明であるが刺突具と思われる。

弭形角製品（7）－七ケ浜町在住の佐藤正三氏によって，以前本貝塚から採集されたものである。鹿角枝の先端部をそのまま弭形角製品の先端部として磨り減らし整形し，下半部に4条の索溝を巡らしたもので，下端部は若干欠失しているので盲孔は浅い。

針（3）－鳥骨を利用し，めどは両面よりモミギリ手法で穿孔されている。その下方に微小のくぼみがあるが，穿孔作業を中途で放棄したものであろう。全面に製作時の細かな擦痕が認められる。

櫛（4，5）－鹿角製のものが2点採集された。ともに欠失部が多く，正確な原形は知りえないが，(4）によると，中央に縦長の孔を有し，歯の数は5本と思われる。表面は鹿角の自然面を磨り減らし，裏面には若干の海綿質部が観察され，縦方向に整作時の擦痕が顕著に認められる。

これらの遺物の編年的位置に関しては表面採集のため明確に指摘できないが，銛頭は，その形態の面から，中期末葉の大木10式から後期初頭の袖窪式あたりの時期の所産と考えられ，又，弭形角製品は，後期後半の時期の所産と考えられる。更に櫛に関しては，前期末葉の大木6式から中期初頭の大木7式に伴なったものと思われる。その他の遺物については，大雑把に前期から中期のものとすべきであろう。

3．歯牙製品（Fig．6－6）

歯牙製垂飾品－鈴木幹生氏によって採集されていたもので，アシカ科動物の臼歯（註－1）に，両面より穿孔したものである。b面には，中途で放棄したと思われる未通孔が見られる。七ケ浜町君ケ岡貝塚からは最近，犬の犬歯（註－2）に穿孔した類例が佐藤捨松氏によって採集されている。ともに時期的にかなりの巾を持っているので，製作時期は明確でないが，前期，中期のものとすべきであろう。

4．貝製品（Fig．6－8）

腕輪－カキ殻を利用して製作されたもので，半分欠失している。穿孔は表面より一方的に行われている。製作時期は大雑把に前期，中期のいずれかと思われる。

5．土器（Fig．7，8）

今回の表面採集調査によって，本貝塚より多くの土器片が採集されたが，いずれも小破片であって，土器の器形，文様構成に関しては不明な点が多く，又，表面採集のため，これらの土器片がいかなる層位関係を持つかについても述べることはできない。ここでは単に採集土器片を各型式に分類し，各型式の土器群の分布等について述べることとするが，後者の点に関しては，貝層との関連の上で述べるべきと思われ，第五章に譲った。

採集された土器片は次の各型式に分類される。

Fig.－7　大木囲貝塚発見遺物4（土器その1）

縄文式時代前期の土器（Fig. 7）

大木1式－ループ文を施したもの（1，2，3）。結束のない羽状縄文を施したもの(4)。

大木2a式－葺瓦状撚糸文を施したもの（5，7，8）。横位の羽状撚糸文を施したもの（6，10）。波状の櫛歯文を施したもの（9）。

大木2b式－S字状連鎖沈文を施したもの（11，12，13）。

大木3式－半截竹管による刺突文（14），へら状工具による刺突文を施したもの(15,16)。

大木4式－波状の細い粘土紐を貼付したもの（17，18，19）。

大木5式－口縁部の波状把手下部に孔を穿ち，細い鋸歯状粘土紐を貼付したもの（20）。口唇部に刻みの入った肥厚した粘土体を持ち，下方に細い鋸歯状粘土紐を貼付したもの(21)。細い梯子状粘土紐を貼付したもの（23）。鋸歯状沈線文を施したもの（22）。

大木6式－沈線による孤線の中途に小さなボタン状貼付を有するもの（24）。波状口縁部下に沈線を左右に区別する縦方向に3つの突起を有するもの（25）。

縄文式時代中期の土器（Fig. 7，8）

大木7a式－彫刻的な波状文を有するもの（26）。逆八の字状で口縁部を充たすもの(27)。縦の突起体及び横位沈線間に刻み目を施したもの（28，29）。

大木7b式－撚糸圧痕文を施したもの（30～33）。

大木8a式－撚糸圧痕文に細隆起線の貼付を併せ持つもの（34～36）。

大木8b式－隆起線（37，39，40），沈線（38）による渦巻文を有するもの。

大木9式－隆起線による渦巻文に擦り消し縄文が加わったもの（41～43）。擦り消し縄文のみのもの（44～46）。沈線による楕円形の区画内に刺突文を有するもの（47）。

大木10式－口縁部に隆起線を有し，撚糸文を施したもの（48）。隆起線に接して刺突文を施したもの（49，50）。

縄文式時代後期の土器（Fig. 8）

袖窪式－口縁に一条の隆起線を巡らし，これに8の字隆起等を有するもの（51）。

宝が峯式－表面は無文であるが，内面に数条の沈線を有するもの（53，54）。又，その沈線をS字状沈線で連結するもの（55）。

平安時代の土器（Fig. 8）

須恵器－青灰色の硬質の土器（56）。

土師器－底部に糸切り痕を有する内黒の土師器（57）。

これらの各型式の土器群の内，量的には，縄文式時代後期のものは少なく，須恵器，土師器に至っては各々一点のみである。縄文式時代前期，中期のものが圧倒的に多い。これら大木各型式の分布等については，第五章に記した。

Fig.－8　大木囲貝塚発見遺物5（土器その2）

採集された縄文式土器片の割れ口を観察した結果，粘土帯の接合面で割れたと思われる土器断面に刻み目を有する資料（52）を一点検出しえた。これは縄文式土器の成形に当って，粘土帯の接合面に刻み目を入れることによって，接合の強化をはかったものと解される。この種の土器片は，現在，東北地方では未報告であり，その時期，分布に関しては不明である。本例も無文部分で，型式名は不明であるが，縄文式時代中期後半から後期初頭にかけてのものと思われる。類例は，山内博士が関東地方，後期初頭堀之内1式土器にその存在を確認され（山内，1940），最近では埼玉県神明貝塚出土の堀之内1式の土器資料（安孫子等，1970），東京都平尾遺跡出土の縄文式時代中期，後期の資料（可児等，1971）に見られる。

6．土製品（Fig. 6）

円盤状土製品－土器破片の周囲を磨って成形しており，多くは円形である（9，10，11）が，三角形状のものもある（12）。時期は縄文式時代中期後半のものと思われる。

土錘（13）－漁網用と思われる。時期は明確には出来ないが，類例は奈良時代末から平安時代のものにある。

7．過去の調査で出土した遺物（Fig. 9）

石器類では，石鏃（文献，16，61等）（1），石匙（文献，29，61，71等）（1，5），石錐（文献29，61等）（1），石篦（文献，33），石斧（文献，29），石棒（文献，10等），石皿（文献，10等），凹み石（文献，71），岩版（文献，71），飾玉（文献，71）（5），玦状耳飾（文献，17，66，71）（5，6，7）等が報告されている。未報告のものには砥石がある。

以上の遺物は報告が断片的であり，その時期に関しては不明のものが多く，わずかに（1）が縄文式時代中期後半の大木9，10式に伴なったと考察されている程度である（文献，61）。

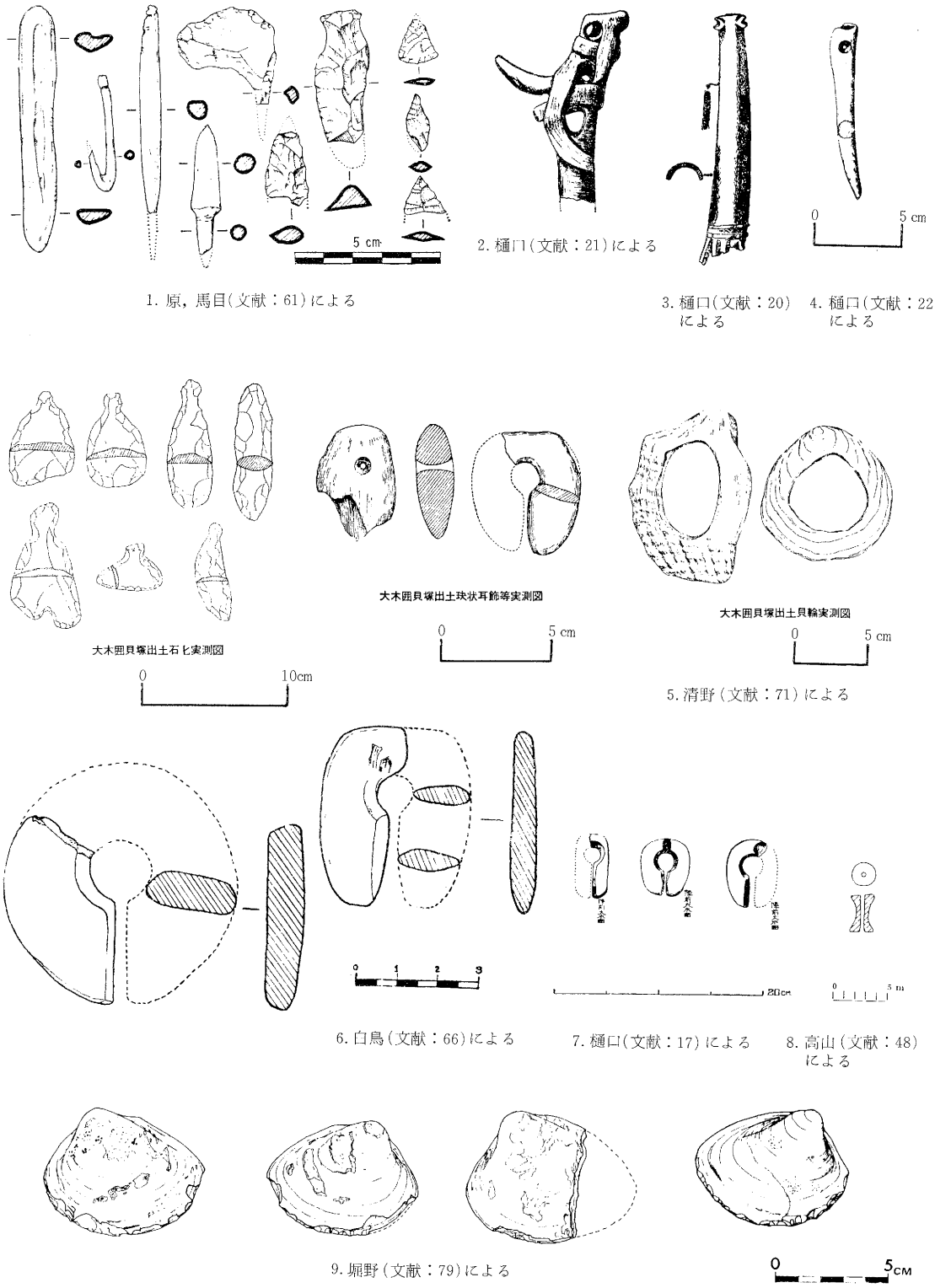
骨角器に関しては，鹿角製の櫛（文献，20，44）（3），鹿角製叉状装飾品（文献，21）（2）鹿角製垂飾品（文献，22）（4）鹿角製の装身具2点（文献，29），尖頭器（文献，61）（1），釣針（文献，61）（1），骨針（文献，61）（1），骨鏃（文献，61）（1），鹿角製ヤス（文献，72）があり，又，鹿角に切痕あるもの（文献，10）も紹介されているが，時期的に不明なものが多く，僅かに，（1）が大木9，10式に伴なったと考察されている（文献，61）のみである。

又，貝製品には，カキ製及びホラガイかニシ製の腕輪（文献，71）（5），ハマグリ製の貝刃（文献，79）（9）があるが，同様に時期的に不明である。

又，人骨に関しては，縄文式時代前期の屈葬人骨が出土している（文献，31）。

土器類に関しては，断片的であるが，上記に報告した諸型式の外に，縄文式時代の晩期（註－3），弥生式時代（註－4）の土器片も出土している。

更に，土製品としては，土偶（文献，31），耳栓（文献，48）（8）があるが明確な時期は不明である。



1. 原，馬目（文献：61）による

2. 樋口（文献：21）による

3. 樋口（文献：20）による

4. 樋口（文献：22）による

5. 清野（文献：71）による

6. 白鳥（文献：66）による

7. 樋口（文献：17）による

8. 高山（文献：48）による

9. 堀野（文献：79）による

Fig.－9　過去の調査で大木囲貝塚より出土した遺物

B．自然遺物

本貝塚発見の自然遺物に関しては，前述したが，今回報告するのは，これに新たに確認したものを加えたものである。

1．脊椎動物門

哺乳綱－ウマ，イノシシ，シカ，クマ，キツネ，タヌキ，イヌ，クジラ，トド，アシカ，オットセイ。

爬虫綱－ウミガメ類。

鳥綱－種名不詳。

魚類綱－サメ，マグロ，スズキ，タイ。

2．節足動物門

甲殻綱－カニ類。

3．軟体動物門

腹足綱－クロアワビ，イシダタミ，クボガイ，サザエ，タマキビ，オオヘビガイ，ヘナタリ，ウミニナ，ツメタガイ，アカニシ，レイシ，イボニシ，エゾボラ。

斧足綱－カリガネエガイ，アカガイ，サルボウ，ハイガイ，アカザラガイ，カキ，イセシラガイ，ハマグリ，シナハマグリ，オキシジミ，アサリ，ウバガイ，シオフキ，アゲマキ，オオノガイ。

以上の様に，自然遺物の点に関しては，かなり不明な点が多く，今後の発掘調査に期待がかけられるが，貝類は，いずれも鹹水産のもので，淡水産のものはないのが注目される。貝塚各地点の貝相の差に関しては後章を参照されたい。

なお，酒詰博士は，植物としてイネをあげているが（文献，39），確実ではない。

このほかに，特殊な遺物として，糞石がある。これは，食肉獣の糞の化石化したものであるという（文献，4，7）。

（註－1．2）　早稲田大学金子浩昌氏の御教示による。

（註－3）　興野義一氏の御教示による。

（註－4）　東北学院大学加藤孝氏の御教示による。

引用文献

山内清男　『日本先史土器図譜』Ⅵ集，1940年3月。

安孫子昭二他　『神明貝塚』　庄和町文化財調査報告第2集，1970年3月。

可児通宏他　『平尾遺跡調査報告』Ⅰ，1971年9月。

第五章　ボーリングによる埋蔵貝層分布調査結果(Fig. 10)

この調査は，前述の様に，本貝塚の実質面に於ける把握を目的として実施した。本年度の調査区域は，貝塚の主体部を含めたおよそ45.000㎡で，史跡指定区域190.000㎡の４分の１弱に当る（Fig. 10）。この区域を基本的には３ｍ間隔でボーリング調査を行なったが，場所によっては，２ｍ或いは１ｍ間隔で実施した地域もある。ボーリング総数はおよそ5.000本に及ぶ。その結果は次の通りである。

今年度の調査区域は，中軸の南北方向に二つの微高部が並び，南部の微高部は東に広がり，一見「長靴状」の形態をとる。この長靴状丘陵の周辺部が貝塚の形成されている場である。

ボーリングによって確認された貝塚群は，その形成される場の違いによって，大きく二つのグループに分類される。

Ａグループ

標高28mから38mの等高線沿いに位置しており，径20ｍ以上の規模を有する８個の貝塚と径10ｍ未満の小規模の貝塚４個より成る。これらの貝塚群をそれぞれ便宜上，Ａ－１，Ａ－２，Ａ－３，Ａ－４，Ａ－５，Ａ－６，Ａ－７，Ａ－８，Ａ－９，Ａ－10，Ａ－11，Ａ－12と呼称すると，Ａ－１，Ａ－５，Ａ－６，Ａ－８，Ａ－９，Ａ－10，Ａ－11の諸貝塚は，いずれも長靴状丘陵部周辺の谷奥部に位置しており，各貝塚の貝層の厚さは，推測も含まれるが，Ａ－１で最厚部１ｍ以上あると思われ，Ａ－５では50cm以上，Ａ－６では，数10cm，Ａ－８で１ｍ前後，Ａ－９，Ａ－10では40cmから50cm程度，Ａ－11では，１ｍ以上あると思われる。

又，Ａ－２，Ａ－３，Ａ－４，Ａ－７，Ａ－12の貝塚群は，長靴状丘陵部周辺部の割合直線的な部分に形成されており，Ａ－２は，最厚部数10cmの貝層を有し，Ａ－３は１ｍ前後，Ａ－４，Ａ－７も同様である。Ａ－12は第二次世界大戦時の海軍道路によって，二つに分断されてはいるが，本来，連続する一つの貝塚と考えて良い。貝層の厚さは１ｍ以上あると思われる。

Ｂグループ

標高13mから25ｍの等高線沿いに位置しており，２個の径10ｍ以下の小規模の貝塚群（Ｂ－１，Ｂ－２）と多くの更に小規模の（径数10cmのものもある）貝塚によって構成される。これらの貝塚群はＡ－12の下方の東側に伸びた小舌状丘陵の縁辺部に沿って分布しており，貝層の厚さは40cmから50cm程度と思われる。これらの微小貝塚群は何らかの埋蔵遺構との関連が考えられる。

Aグループの貝塚群によって囲まれた長靴状丘陵部は，全く貝層は確認されず，凝灰岩基盤へは20cmから30cm程度で達する。又，これらの貝塚の外部に於いても，Bグループの貝塚群の所在する地域以外は，貝層は確認されず，同様に基盤には20cmから30cm程度で達する様である。

これらの諸貝塚群と表面採集によって得られた土器群との関係についてみると，各土器型式毎の細かな分布状況については，地点等による差違は認められないが，大まかな点では，認められる。Aグループの各貝塚及びその外側の地域に於いては，A－7を除いて，大木諸型式が殆どすべて散布していると考えられるのに対して，A－7は大木1式から6式までの縄文式時代前期の土器が量的に多く，更に，Aグループの貝塚群によって囲まれた丘陵中央部に於いては，これとは逆に，縄文式時代中期中葉の大木8式以降，後期中葉までの比較的新しい時期の土器が採集され，それ以前の前期の土器は量的には極めて少ない。又，Bグループの貝塚群に関しては，土器片が少なく，時期に関しては不明である。

貝塚各地域の貝相に関しては，それぞれの地域に於いて，ハマグリ，カリガネエガイ，サルボウ，アサリ，カキ，ツメタガイ等の貝類が散布しており，各地域によって貝相に顕著な差は認められない。

以上の諸結果を綜合すると，従来，表面観察のみによって推測されて来た大木囲貝塚（文献，55，63）の実体は，今年度の調査範囲では，Aグループの大小12個の貝塚群の集合によって馬蹄形を呈する主体部と，これに付属するBグループの小貝塚によって構成され，その規模は南北260m，東西210mの範囲に亘り，その時期はAグループの貝塚群は主に縄文式時代前期，中期であり，この貝塚群によって囲まれた地域は縄文式時代中期中葉から後期中葉にかけての時期であるということ，更に，貝塚各地点に於ける貝相には顕著な差が認められず，すべて鹹（かん）水産の貝類によって構成されているということに集約される。この中で特に注目すべき成果は，Aグループの貝塚群がA－7を除いて，すべて縄文式時代前期初頭から中期末葉までの大木諸型式を出土している点である。この事実によって，大木囲貝塚Aグループの諸貝塚は，縄文式時代前期初頭に於いて，既に今日と同様の広大な規模の馬蹄形貝塚を形成していたものと解される。これらの諸貝塚の更に細かな形成時期に関しては，今後の発掘調査に待たねばならないが，馬蹄形貝塚の形成過程を知る上での一つの示唆を与えるものである。

又，この調査によって，表面に散布している貝殻の分布状況と地下の埋蔵貝層の分布状況とでは，かなりの違いを示すという点も確認された。特に表面観察によって連続していると思われる貝層が地下に於いて明確に分離しているという事実が確認されたことは，丘陵中央部には貝層が全く認められないという結果とあわせて考える場合，この丘陵に営まれた集落構造の実体把握に大いに意義あることと思われる。この様な観点からも，今後の発掘調査に期待がかけられる。

大木囲貝塚文献目録

大正８（1919）年

（１）　２月　　松本彦七郎　　「日本先史人類論」『歴史と地理』第３巻第２号

（２）　３月　　長谷部言人　　「宮戸島里浜貝塚の土器に就て」『現代之科学』第７巻第３号

（３）　５月　　松本彦七郎　　「宮戸嶋里浜及気仙郡獺沢介塚の土器ー附，特に土器紋様論（二）」『現代之科学』第７巻第６号

（４）　11.12月　　長谷部言人　　「石器時代遺跡に於ける糞石」『人類学雑誌』第34巻第11・12号

大正14（1925）年

（５）　11月　　清野謙次　　「陸前国宮城郡七ケ浜村大木囲貝塚」『民族』第１巻第１号

大正15（1926）年

（６）　12月　　杉山寿栄男　　『日本原始工芸』第３集

昭和２（1927）年

（７）　10月　　長谷部言人　　「石器時代遺跡に於ける糞石」『先史学研究』

昭和３（1928）年

（８）　５月　　清野謙次　　『日本石器時代人研究』

（９）　10月　　東京帝国大学　　『日本石器時代遺物発見地名表』増訂第５版

（10）　12月　　村主岩吉　　「塩釜付近の先史時代遺跡と原石採取地址」『考古学雑誌』第18巻第12号

昭和４（1929）年

（11）　５月　　山内清男　　「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号

（12）　７月　　山内清男　　「繊維土器について追加ー」『史前学雑誌』第1巻第3号

昭和５（1930）年

（13）　５月　　山内清男　　「斜行縄紋に関する二・三の観察」『史前学雑誌』第２巻第３号

（14）　　HIKOSHICHIRO MATSUMOTO　「Evidence of the Post-glacial Cycle of Climatic change in North Eastern Japan」『Science Réport Tohoku Imp. Univ.』IInd Series Vol. XIII

昭和６（1931）年

（15）　９月　　永沢譲次　　「哺乳動物歯牙の変異に就いてー附，貝塚出土の鹿の歯牙の変異に就いてー」『史前学雑誌』第３巻第５号

昭和８（1933）年

(16)　１月　喜田貞吉　「我が国発見石鏃の脚に就いて(一)」『考古学雑誌』第23巻第１号

(17)　１月　樋口清之　「玦状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻第１号

昭和12（1937）年

(18)　１月　山内清男　「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第１巻第１号

昭和14（1939）年

(19)　８月　酒詰仲男　「用語解説・大木貝塚」『人類学・先史学講座』第11巻

(20)　12月　樋口清之　「日本先史時代人の身体装飾(上)」『人類学・先史学講座』第13巻

昭和15（1940）年

(21)　３月　樋口清之　「日本先史時代人の身体装飾(下)」『人類学・先史学講座』第14巻

(22)　６月　樋口清之　「垂玉考」『考古学雑誌』第30巻第６号

(23)　９月　小牧実繁・藤岡謙二郎　「先史時代の地理的環境」『人類学・先史学講座』第17巻

昭和16（1941）年

(24)　２月　樋口清之　「滑車型耳飾考」『考古学評論』第４輯

(25)　11月　三森定男　『日本原始文化』

昭和18（1943）年

(26)　４月　「原始文化」『新修日本文化史大系』第一巻

昭和27（1952）年

(27)　12月　加藤孝　「阿武隈，北上両河岸段丘，並に松島湾岸諸島に於ける貝塚の分布とその編年」『宮城学院女子大学研究論文集』II

昭和28（1953）年

(28)　４月　東北史学会　「宮城県の歴史」『東北の歴史叢書』第四編

昭和30（1955）年

(29)　２月　斉藤忠　『日本考古学図鑑』

昭和31（1956）年

(30)　10月　加藤孝　「陸前国大松沢貝殻塚の研究(その二)」『宮城学院女子大学研究論文集』第10号

昭和32（1957）年

(31)　３月　伊東信雄　「古代史」『宮城県史』I

昭和33（1958）年

(32)　９月　斉藤忠　『日本全史』１

昭和34（1959）年

(33)　6月　鎌木義昌　「広域文化圏の形成，縄文前期文化」『世界考古学大系』1

(34)　6月　坪井清足　「大木囲貝塚」『図解考古学辞典』

(35)　9月　酒詰仲男　『日本貝塚地名表』

昭和35（1960）年

(36)　3月　横山浩一・佐原真　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』1

(37)　9月　加藤孝　「考古学上より見た塩竈市周辺の遺跡」『塩竈市史』III 別篇I

昭和36（1961）年

(38)　1月　小岩末治　『岩手県史』第一巻

(39)　5月　酒詰仲男　『日本縄文石器時代食料総説』

(40)　12月　伊東信雄　「東北の考古学」『古代文化』第7巻第4号

(41)　12月　加藤孝　「松島湾内の縄文遺跡」『古代文化』第7巻第4号

昭和37（1962）年

(42)　12月　加藤孝　「大木囲貝塚」『日本考古学辞典』

昭和39（1964）年

(43)　3月　山内清男・甲野勇・江坂輝弥編　「縄文式土器」『日本原始美術』1

(44)　7月　甲野勇　「土偶，装身具」『日本原始美術』2

(45)　11月　東京，天理教館　「古代の装身具―中国，朝鮮，日本」『天理ギャラリー』ー』第10回展

昭和40（1965）年

(46)　6月　「主要遺跡概説，大木囲貝塚」『図説日本文化史大系』1

(47)　7月　林謙作　「東北」『日本の考古学』II

(48)　12月　高山純　「縄文時代に於ける耳栓の起源に関する一試論」『人類学雑誌』第73巻第4号

昭和41（1966）年

(49)　1月　江上波夫　「日本美術の誕生」『日本の美術』2

(50)　3月　宮城県教育委員会　『宮城県遺跡地名表』

(51)　4月　渡辺誠　「縄文文化時代における釣針の研究」『人類学雑誌』第74巻第1号

(52)　5月　八幡一郎　「縄文土器・土偶」『陶器全集』29

(53)　12月　高柳光寿・竹内理三編　「大木囲貝塚」『角川日本史辞典』

昭和42（1967）年

(54)　3月　七ケ浜町誌編纂委員会　『七ケ浜町誌』

(55)　9月　加藤孝　「縄文文化」『東北の歴史』上巻

(56)　10月　興野義一　「大木式土器理解のために（I）」『考古学ジャーナル』No.13

昭和43（1968）年

(57)		J. Edward Kidder	『Prehistoric Japanese Arts Jōmon Pottery』
(58)	1月	興野義一	「大木式土器理解のために(II)」『考古学ジャーナル』No.16
(59)	3月	興野義一	「大木式土器理解のために(III)」『考古学ジャーナル』No.18
(60)	5月	馬目順一	「台の上貝塚に於ける土器意匠文の研究」『小名浜』
(61)	9月	原信之・馬目順一	「宮城県大木囲貝塚発見の遺物について」『古代』第51号
(62)	9月	興野義一	「大木式土器理解のために(IV)」『考古学ジャーナル』No.24
(63)	12月	小笠原好彦	「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器」『仙台湾周辺の考古学的研究』
(64)	12月	金子浩昌	「縄文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について」『仙台湾周辺の考古学的研究』

昭和44（1969）年

(65)	3月	楠本政助	「縄文中期における古式離頭銛の変遷」『古代文化』第21巻第3・4号
(66)	3月	白鳥良一	「玦状耳飾の新資料について」『宮教考古』第1号
(67)	3月	小井川和夫	「大木2a式にみられる櫛歯文について」『宮教考古』第1号
(68)	5月	興野義一	「大木式土器理解のために(V)」『考古学ジャーナル』No.32
(69)	8月	八幡一郎監修	『現代日本考古学』
(70)	9月	高橋富雄	「宮城県の歴史」『県史シリーズ』4
(71)	9月	清野謙次	「陸前国宮城郡七ケ浜村大字要害字大木囲貝塚」『日本貝塚の研究』
(72)	10月	丹治英一	『宮城県七ケ浜町の遺跡』

昭和45（1970）年

(73)	2月	菊池勝之助	『地方誌の基礎研究宮城県地名考』
(74)	3月	宮城県教育委員会	『宮城県文化財目録』
(75)	9月	興野義一	「大木式土器理解のために(VI)」『考古学ジャーナル』No.48
(76)	10月	宮城県教育委員会	『発掘された古代の歴史－宮城県考古展目録』
(77)	10月	斉藤忠	「山内さんを憶う－仙台の事ども」『考古学ジャーナル』No.49

昭和46（1971）年

(78)	3月	宮城県教育委員会	『宮城県の文化財』

(79)　8月　　堀野宗俊　　「仙台湾周辺貝塚発見の貝刃について」『仙台湾』創刊号

昭和47（1972）年

(80)　7月　　小林達雄　　「縄文主要遺跡要覧・大木囲貝塚」『新版考古学講座』11別巻

(81)　7月　　宮城県高等学校社会科教育研究会歴史部会　「宮城県の歴史散歩」『全国歴史散歩シリーズ』4

(82)　9月27日夕刊 伊東信雄　　「山内氏のこと－考古学十話(2)」『河北新報』

文末ながら，本年度の環境整備事業の実施に当って，多くの方々から御指導，御協力を得た。銘記して深甚の謝意を表する次第である。

〈指導委員〉

伊東信雄・芹沢長介・加藤孝・岡田茂弘・興野義一・佐々木嘉彦・丸田頼一の諸氏

〈調査協力者〉

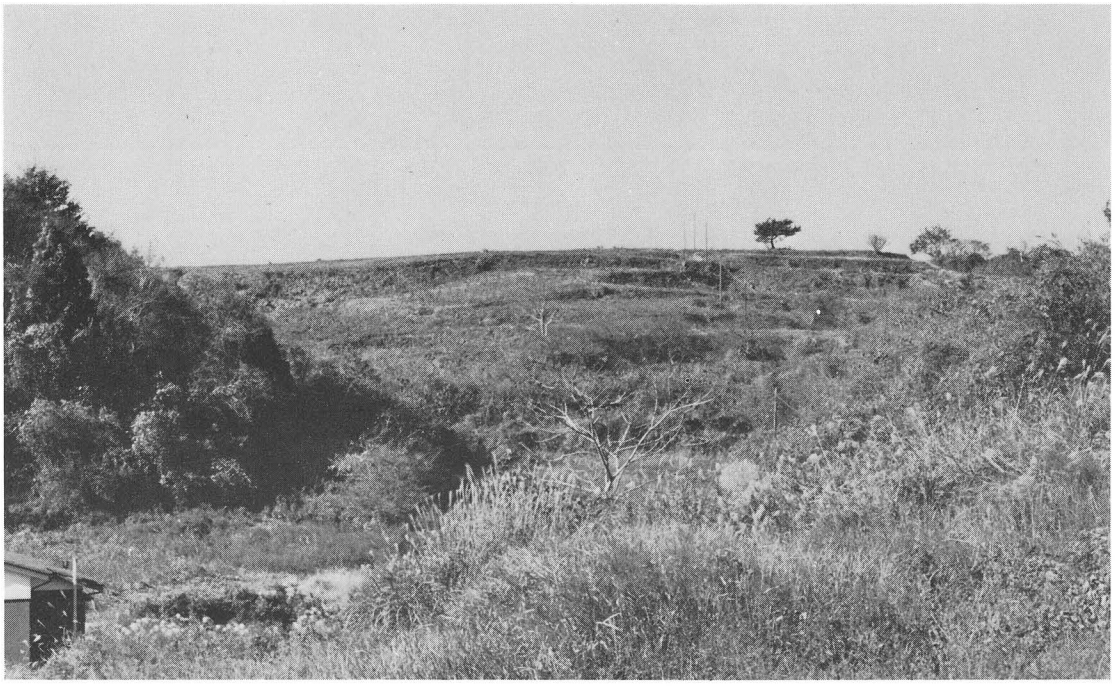
文化庁記念物課・宮城県教育庁文化財保護室・宮城県多賀城跡調査研究所・七ケ浜町役場・七ケ浜町公民館・東北大学文学部考古学研究室・宮城教育大学考古学研究会・七ケ浜中学校・松本彦七郎・金子浩昌・渡辺誠・天理大学参考館・安田喜憲・佐藤捨松・佐藤鋼治・佐藤信・佐藤とめよ・佐藤みのる・鈴木勝子・鈴木まゆみ・鈴木幹生・佐藤正三・黒川利司・小野寺祥一郎の諸氏

図　　版

大木囲貝塚台地上の刈り払い作業（南より北を見る）

大木囲貝塚台地上の刈り払い後の状態（南より北を見る）

大木囲貝塚の刈り払い前の状態（貝塚の東南方向より見る）

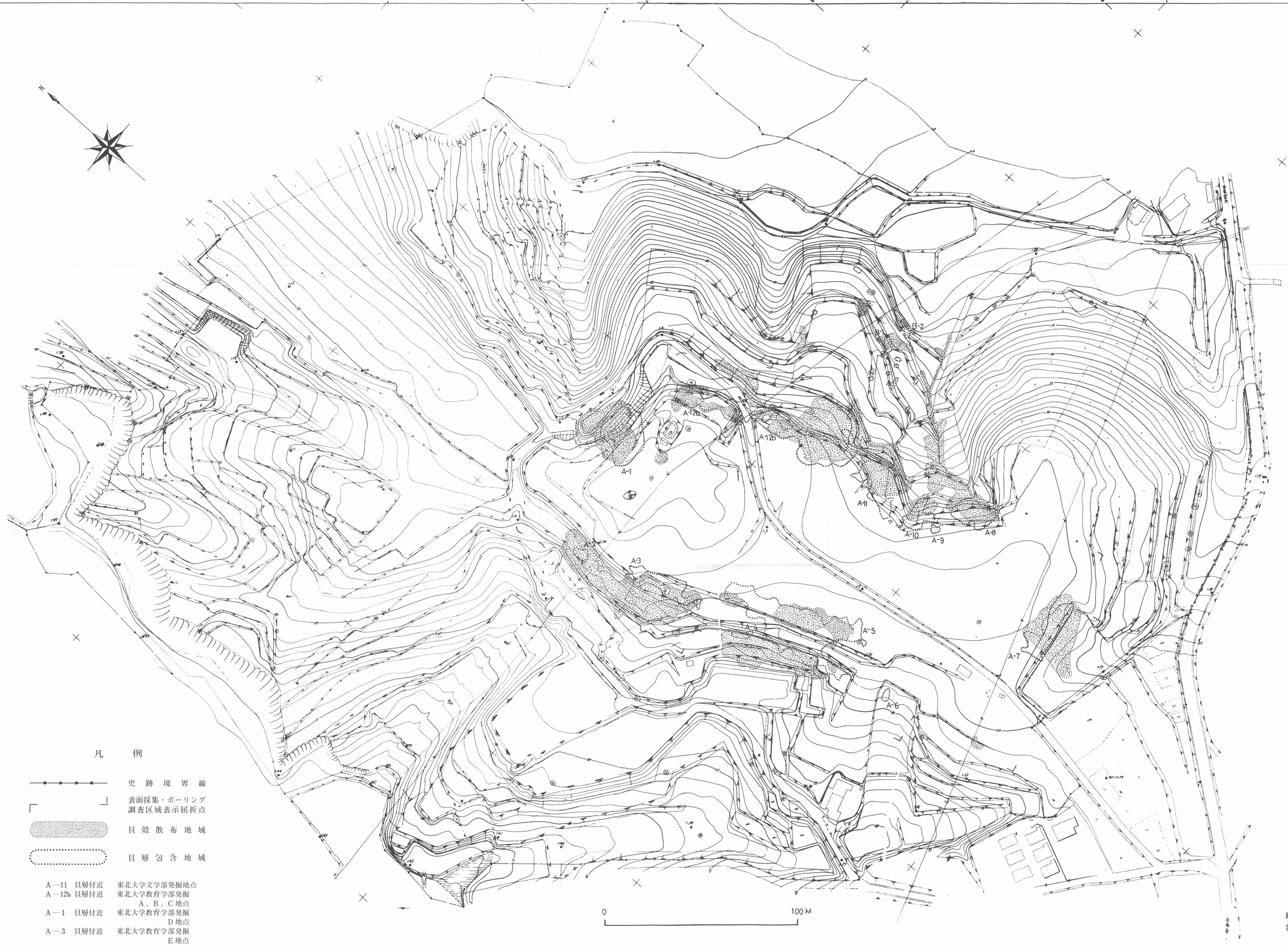


大木囲貝塚の刈り払い後の状態（貝塚の東南方向より見る）

大木囲貝塚西側斜面（南より北を見る）

大木囲貝塚東側斜面の遠景（東側丘陵より）

プレハブ建物は調査事務所



凡　例

- 史跡境界線
- 表面採集・ボーリング調査区域表示屈折点
- 貝殻散布地域
- 貝層包含地域

A—11　貝層付近　東北大学文学部発掘地点
A—12b　貝層付近　東北大学教育学部発掘 A、B、C地点
A—1　貝層付近　東北大学教育学部発掘 D地点
A—3　貝層付近　東北大学教育学部発掘 E地点
（文献：63）

縮　尺　1:1000
等高線　1m

昭和47年12月測量
加藤測量社

Fig. 10　史跡「大木囲貝塚」地形測量図

七ケ浜町文化財調査報告書（第１集）
史跡「大木囲貝塚」

昭和48年３月20日　印刷
昭和48年３月31日　発行

発　行　宮城県七ケ浜町教育委員会
宮城県宮城郡七ケ浜町吉田浜字野山

印　刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24 TEL (0222)25－6466